

I 令和3年度の運営総括及び来期の課題

2020年から始まった災害『新型コロナウイルス』の猛威はまるで収まらず、今年度も振り回され、ウイルスありきの児童館運営となった1年だった。昨年は、まるで未知のウイルスに対し、対策がわからずただただ戸惑ったが、今年度はある程度はウイルスに対する対処が定まり、感染対策に気をつけつつ、徐々にイベントを行ってきた。その時その時の状況に応じながら、臨機応変にイベントの中止や縮小なども行った。

今後何年コロナウイルスと共存していかねばならないのかはわからないが、“With コロナ”として、生活の中に常にウイルスがあることを前提とした上で運営をしていくように考え方自体を変えていかないとならないと感じる。やらない、できないばかりではなく、“じゃあどう変えたらできるか？”という風に考え、逆境に負けない、しなやかな地域の居場所であり続けたいと思う。また、加えて感染症対策をしっかりとし、利用者が安心安全に利用できる児童館運営をしていきたい。

1. 乳幼児事業

(1) 総括

やはりコロナ禍以前より利用は少ないが、それでも昨年度からの継続利用の乳幼児親子が多かった印象。コロナ禍で様々な機関で出入りや子育てイベントなどが規制され、縮小・中止が進む中、子育てを不安に感じたり、誰に何を聞いたらいいのか迷う保護者達が多かったようだ。そういった保護者達が、情報や繋がりを求め児童館を利用していたので、すぐにお互いが繋がりが、悩みや不安を共有でき、親子の良い憩いの場として機能していた。児童館を通じて誰かと話したり笑い合ったり、悩みを共有することで保護者の心が軽くなり、また子ども達も家でお母さんとだけでのコミュニケーションだけではなく、同年代の子ども達と関わり合うことでより豊かな発達に繋がっていく。まさに支援センターや児童館だからこそできることで、地域の子育て支援に貢献できたと感じている。

①ちびっこ広場

毎週水曜日の午前中に『ちびっこ広場』を行っている。内容は絵本読み聞かせ、手遊び、親子体操、工作、誕生会等となっている。『ちびっこ広場』への参加を目的に来館する親子が多く、親子で一緒に手遊びやふれあい遊びをしたりする楽しさを共有している。

今年度は2020年度から継続的に参加してくれていた親子が多いことから、月齢の高い2歳児も多かった。そういった月齢の高い子らが活発にいきいきと広場を楽しむ姿を見て、下の世代の子ども達も刺激を受け、触発されるという良い流れができていたように思う。

祖父母が孫を連れて来館することも多く、祖母同士、祖母と母親などの異世代の交流も

度々見られる。こうして“地域一体となって子育てをする”という環境ができ上がってきている。今後も利用者のニーズをしっかりと捉え、より楽しい、居心地の良い児童館を目指して管理運営を行っていきたい。

②つくって遊ぼう

毎月第2週目の水曜日、木曜日、金曜日に親子で一緒に工作を楽しむ行事として『つくって遊ぼう』を行った。季節に合わせた工作や、月齢の低いお子さんでも遊べる手作りおもちゃなど、親子で楽しんで工作できるように工夫をしてきた。この行事をきっかけに、工作が好きになっていく子どももいるようで、『ちびっこ広場』に参加していた幼児が成長し、児童館の工作コーナーで廃材を使い楽しそうに工作をしている姿もよく見られる。

③しゃべろっと

南区健康福祉課主催の子育て支援研修会に参加し子育て支援リーダーとなった『子育てオーエンジャー☆みなみ』が中心となり、乳幼児の母親対象に様々なイベントを企画し、支援を行っている。味方児童館を活動場所とし、育児中のちょっとしたストレスや愚痴を気軽に話したり育児の悩みを相談し合うのが目的だ。これまでは話しやすい環境づくりをするためにハンドトリートメントやお茶、お菓子も用意し、予約なしで気軽に遊びに来られるような内容だったが、2020年度からは飲食やハンドトリートメントは中止、コロナ禍でも利用者が安心・安全に参加できるものに内容を変えて行った。予定では年間6回の企画だったが、度々コロナウィルスの影響を受け、予定通り行えなかった。9月、1月、3月のしゃべろっとは、感染の急拡大を受け中止となった。

7月のしゃべろっとでは『ちいさなサマーコンサート』として、講師の方々をお招きしオカリナとピアノの演奏会を行った。オカリナの、どこか懐かしい、ゆったりと優しい音色に、親子でうっとりとして聴き入っていた。選曲には、子ども達も耳馴染みのある歌、母親世代にとっても懐かしい歌などを盛り込んでもらった。親子で一緒に楽しむことができるこのコンサートは、アンケートの結果もとても好評だった。

11月には『親子で人形劇を楽しもう』とし、しゃべろっととして初の試みで劇団『赤ずきん』の方々をお招きして人形劇を開催。演目は、『ノントン』や『おはながわらった』、『はらぺこあおむし』など、誰もが子どもの頃に親しんだことのある童謡や絵本を題材にした内容ばかりだったので、母親達も食い入るように観ていた。子ども達も、鮮やかな舞台の色彩やくるくる動く動物の人形達をよく観ていた。

まだまだ味方児童館の存在自体を知らない方や、知っていてもなかなか一歩踏み出すことができない母親も多い。地域の方と協力しながら、そうした母親達を孤立させないためのケアを今後も続けていきたい。

④BP講座

2～5か月の第1子とその母親を対象とした、初めての育児の学び、親子の絆づくり、仲間づくりを目的とした全4回コースのBP講座は、今年度は人数を制限して行った。コロナ禍で様々な子育て支援のイベントや育児相談、健診などが中止になり、不安な思いを抱えた新米ママが多く参加した。子どもの発育についての勉強会をしたり、同じ月齢の子どもを抱える母親として悩みや思いを共有し合い、仲間として絆を深めた。

(2) 来期の課題

味方児童館は、土日に父親が幼児を連れて来館することが多いため、来年度は外部講師をお招きして父親向けの講座や、父親と子どもの父子向けイベントを行っていききたい。共働きが当たり前の時代でもあり、あえて父親を対象を絞ることで、なかなか児童館に行きづらいつ感じている方にも関心を持って来館してもらえききっかけになるのではないかとと思う。母親とはまた違う、父親ならではの子育ての不安や困りごとにも寄り添っていきたいと考えている。

2. 小学生事業

(1) 総括

今年度も昨年に引き続きコロナウィルスの影響で非常に小学生の来館が少なかったのが印象的だった。乳幼児親子よりも、小学生の来館の減少の方が目立っていた。その背景には、コロナ感染拡大による来館の自粛、児童館での遊びの制限、また、地域に簡単に赴けないことによる、子ども達の中の児童館の存在の認識の低下があると思われる。これらが重なり、子ども達の“児童館離れ”が大きく進んでいるように感じる。昨年からのウィルスの影響で、児童館に行かずに家で遊ぶという習慣が身についている子が多く、遊びに来てくれても制限されてやりたい遊びができないストレスを抱えている様子だった。

ただ、相変わらず味方児童館の特長ともいえる異年齢・異学校の子ども達同士の交流は盛んだ。来館が少ないとそれはますます顕著で、年上の子ども達が年下の子ども達を受入れ、一緒に遊ぶ姿が日常的に見られていた。遊びが制限される中でも、児童館が楽しいと思ってもらえるようなことを考えていくのが大切なので、今後も子ども達の自由な発想や気持ちを大切に、寄り添いながら、子ども達と一緒に楽しい児童館をつくりあげていきたい。

①なかよし広場・おりがみキッズ・つくって遊ぼうなどの定例行事

毎週火曜日に、その日に遊びに来ていた小学生が、30分間職員の企画したレクリエーションをして遊ぶというイベントだ。職員が企画したレクリエーションを行うので、子ども達が自分では思いつかないような遊びができ、遊びが広がるというメリットもある。内容の中には、子ども達の防災に関する知識と意識を高めるために『ミニ避難訓練』という

ものも定期的に組み込んだりもする。『なかよし広場』は、異学年の子ども達同士で交流できるので、ここが児童館の良い部分だと実感させられる。

②移動児童館

今年の『移動児童館』も例年通り『味方ひまわりクラブ』で二度行った。内容もコロナ禍でできる内容を考え、一度目は、シルエットクイズや〇×クイズなど、子ども達が座っていてもその場でできるレクリエーションの提供と、児童館で行うイベント『ぬりえコンテスト』へのひまわりクラブの子ども達の参加を内容とした。

二度目は大型絵本の読み聞かせと壁面工作材料の提供ということで、冬の小人の吊るし飾りのキットと干支だるまの正月飾りのキットを作成し届けた。ぬりえは、“ぜひ自分の絵に投票しに、児童館に遊びに来てね”という趣旨を含ませ、冬の小人の吊るし飾りは、子ども達に完成させてもらった後児童館に飾り、“いつでも見に来てね”と来館に繋げるようにした。コロナ禍では、かなりできることが制限された移動児童館となったが、とても喜んでもらったので、次年度もできる形での移動児童館を実施していきたいと思う。

③その他の行事

コロナウィルスの影響で中止にした行事もあったが、やり方を変えたり、規模を縮小して行った行事も多い。例えば、『ハロウィンパーティー』は、昨年度からやり方をどんどん変えている。例年続いていた、お向かいのデイサービスセンター味方への子ども達の慰問は自粛したが、子ども達とお年寄りの方々にプレゼントを制作し、届けることで繋がりを保っている。パーティーの方は、今年は『ハロウィン5days』とし、日数を長く設け、『ハロウィンコロコロボール』というゲームに期間中挑戦でき、ちょっとしたおみやげのお菓子がもらえるというコロナ渦ならではの催しに変えた。

また『おまつり』も企画したが、結局感染状況などにより断念。代わりに何か少しでもおまつりに近いことをしてあげたいという思いから『ダーツ5days』を企画。日にちを分散し、一度に人を集めないように工夫し、おまつりのブースのような遊びができるようにした。こんな状況下でも、少しでも子ども達に楽しみを提供したいといろいろ工夫し、できるやり方で楽しんでもらうことができたと感じる。

(2) 来期の課題

昨年同様、“with コロナ”の中で子ども達が安全安心に遊べる企画を考えていく。その時々状況に応じ、柔軟にやり方を変え、時代に沿った児童館運営で子ども達を楽しませていけるよう、進み続けたい。

3. 中・高生事業

(1) 総括

今年もやはりコロナの影響で様々な共通事業を中止とせざるをえなかった。学校という機関とは連携はできなかったが、中学生は相変わらず遊びに来ていた。日々の生活の話や学校、家族、友達関係の話などをスタッフに話し帰っていく姿が頻繁に見られた。高校生は、来館はかなり減ったが、大学生、社会人となった子ども達が近況報告がてら児童館のボランティアに来てくれることが増えた。度々来館し、小学生の遊び相手や話し相手をしてくれることで、小学生達も憧れを抱いたり、さらに自分達よりも下の年齢の子ども達に優しく接してあげたり面倒を見てあげたりすることができてきている。児童館を利用した子ども達が成長し、自分達がしてもらったように今度は下の世代に返していく、こうした循環が双方に良い刺激と成長を与えていると思う。この流れを大切に、幅広い世代同士が交流できるよう手助けしながら見守っていきたい。

①クリスマス会

今年もクリスマス会で味方中学校吹奏楽部の生徒達がクリスマス演奏会を行ってくれた。昨年同様、鑑賞する対象を小学生30名と限定とし実現できた。発表の場がなかなかなかった中学生達にとっても地元の子供達に還元できる良い機会となったようだった。今年の吹奏楽部は、小学生の頃児童館を頻繁に利用していた子ども達が多かったからなのか、打ち合わせの時からやる気が違ったと、顧問の先生が話してくれた。演奏するパートがない時に、イラストを描いたパネルを一人一人が持って後ろで揺らす、ディズニーの曲『レクトリカルパレード』の演奏の際に観客がより楽しめるようにディズニーキャラクターの帽子を皆で被る、など、これまではなかった新しい企画を沢山考え、盛り込んでくれたようだ。ここでも、自分達より下の世代を楽しませてくれようとする思いと成長が感じられ、とても嬉しく感じた。

(2) 来期の課題

中高生においても、やはりコロナの中でも実現可能な、中高生がもっと児童館で活躍できたり、主役になれるような事業を考えていきたい。“with コロナ”で、できる形での連携を、ということで、『児童館 OBOG による中学生のための座談会』の計画を、地域の方にも相談・協力を仰ぎながら練っていく。この事業に関しては、中学校側の協力が必要になってくると思うので、積極的に中学校に働きかけていく。

4. 地域との連携事業

①味方地区公民館との連携事業

- ・人形劇（7月）…実施
- ・食育講座おはよう朝ごはん（7月）…中止
- ・陶芸教室（7、8月）…実施
- ・育児講座ベビーマッサージ（6月）…実施
- ・科学にふれよう（11月）…中止

②味方小学校、おむすびクラブとの連携事業

- ・いきいき子ども塾「小学校に泊まろう」…中止
- ・「自学おうえん隊」…実施
- ・文化祭体験教室「カブラ」…中止

③味方中学校との連携事業

- ・職場体験（7月）…中止
- ・クリスマス会吹奏楽部演奏会（12月）…実施
- ・おまつり生徒ボランティア（8、2月）…中止

④ボランティアとの連携事業

- ・ちびっこクリスマス会
- ・クリスマス会
- ・ちびっこ広場での絵本の読み聞かせ
- ・瓢箪栽培ボランティア